毎日新聞　2011年（平成23年）3月1日（火）夕刊

知の巨人・梅棹忠夫を探検する――小長谷 有紀

現地調査記録、写真、ファイルなど整理

世界に迫るツボを知る

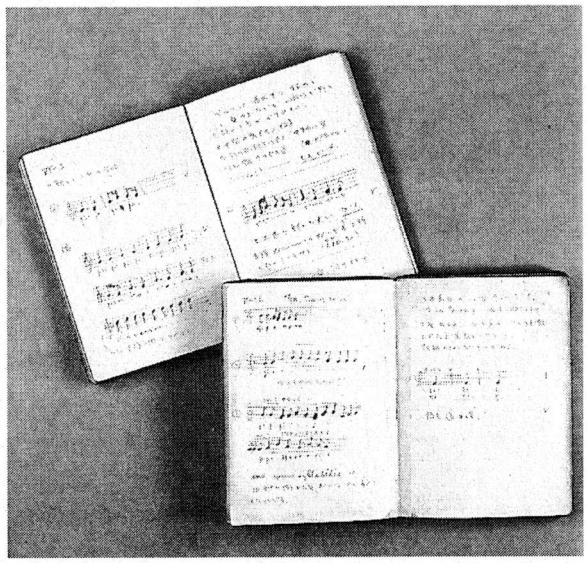
＝小松雄介撮影

わたしが初めて梅棹忠夫に会ったのは1984年の春のことだった。モンゴル乳製品に関する拙稿を謹呈するために、国立民族学博物館（以下、みんぱく）の館長室を訪問した。

50年代に彼が書いた一連の諸論文を拙稿で利用したと告げると、先生は「ほうか、つかえるか」とおっしゃった。論文は、人に読まれるために書くものであり、利用され、克服されることに意味がある。どんどん使って批判してほしい、という姿勢を示された。しかし一方で、40年代に彼が書いたフィールド・ノート類については、見せてほしい、貸してほしいというわたしの申し出を、きっぱりと拒絶された。いかに多忙であれ、青春の情熱をかたむけた証しは自分でまとめたい、という強い願望がうかがわれた。

その後、失明した彼に代わって、くだんの資料をひもとくことになったけれども、著作集刊行のために整理できたのはごく一部にとどまった。大部の資料は、手つかずのまま残った。何しろ、量が膨大なのである。写真は3万5000点。フィールド・ノートだけで100冊以上。さまざまなファイルは約1万件。彼自身の著作物だけでも7000件に及ぶ。

今春、みんぱくで開催される「ウメサオタダオ展」のために、わたしたちはこの膨大な資料を「探検」し始めた。



大興安嶺探検隊のときのフィールド・ノート2冊（1942年）。梅棹氏は各種の鳥の声や沢をわたる風の音を採譜している

もはや本人に聞いて確かめることができないという意味では、地図上の空白地帯のようなものだ。そして日々、思いがけない発見をした。

例えば、中国東北部の大興安嶺を探検したときのフィールド・ノート2冊には、さまざまな鳥の声が採譜されていた。沢をわたる風の音まで。ジュルジュルジュル……。また例えば『実戦・世界言語紀行』には、イタリア語の単語カードはもう不要になったのでポー川に捨てた、と書いてあるとおり、紙の束の浮かんだ川面が撮影されていた。

思いがけないものが見つかるなら、必ず見つけたいものだってある。例えば、カイバル峠からコルカタまで、梅棹はフォルクスワーゲンの助手席に乗り、膝の上にタイプライターを乗せ、ローマ字で旅行記をつけた。それが「文明の生態史観」の発想の源泉である。あるはずだ。捨てるはずがない。あった！

そんな「探検」の楽しさは、ぜひとも多くの人たちと共有したい。彼の残した資料を探検すれば、我々自身が世界にどう肉薄するとよいのか、そのツボがわかる。どのように山を描いたか、どのように人と自然を記録したか、どのように写真を撮ったか、どのように旅を記録したか。

元祖「知的生産の技術」者である梅棹が残した資料。それを探検するということは、現場を見て未来を構想する力がどのように培われたかを知ることであり、それは混迷の時代のいまこそ、老若男女すべてに等しく必要なことである、とわたしは思う。

（こながや・ゆき＝国立民族学博物館教授、モンゴル学）

10日から特別展

日本の文化人類学の開拓者で昨年7月に90歳で亡くなった梅棹忠夫・国立民族学博物館初代館長の業績を展覧する「ウメサオタダオ展」は、3月10日から6月14日まで大阪府吹田市の同博物館特別展示館で開催される。